

現代の批判理論における方法論研究
ハーバーマス、ホネットにおける「再構成的批判」を中心に
成田大起

本稿の目的と意義

本稿の目的は、J.ハーバーマスと A.ホネットの批判理論が共有する批判の方法論を提示し、それによって彼らの批判理論の形成史を方法論的観点から読み解くことである。

批判理論は、批判によって現代社会の問題点をあぶり出して変革を意図する実践的な理論である。だが、現代の批判理論の代表論者とも言えるハーバーマスもホネットも、批判理論における「批判」の意味を明確にせず、批判を通じて理論と実践を媒介するための方法の問いを明示的に主題化しているわけではない。これに対し本稿は、「批判の方法論」という新たな解釈の視点を提示することで、彼らの批判理論における批判の内容や構造、理論と実践の関係を解明する。

本稿の意義は主に三つある。第一の意義は、ハーバーマスとホネットの批判理論が共有する「再構成的批判」という批判の方法論を提示することである。再構成的批判とは、社会変革の実践の参加者視点に焦点を当てる「再構成」という第一段階と、この実践の機能不全を理論的視点から分析する「病理批判」という第二段階からなる議論構造である。この議論構造を解明することで、「内在的」かつ「系譜学的」な批判を行う批判理論の独自性と、他の理論と比較した際の強みを明確にすることが可能になる。

第二の意義は、ハーバーマスとホネットの批判理論の形成史を再構成的批判の展開という観点から読み解くことである。ハーバーマス研究では、『認識と関心』、『コミュニケーション的行為の理論』、『事実性と妥当』という三つの主著の間の「転回」や断絶が強調される。こうした研究に対抗し、本稿はハーバーマスの理論形成史を再構成的批判の精緻化という連続した過程として捉える新たな解釈を提示する。またホネット研究では、「承認論」「社会的病理論」「ヘーゲル的社会理論」というホネットの三つの動向が個別に扱われている。こうした研究に対抗し、本稿はホネットの理論形成史もまた再構成的批判を展開する過程として連続して捉える新たな解釈を提示する。

第三の意義は、方法論の分析に基づいて彼らの再構成的批判の問題点と課題を指摘することである。「再構成的批判」という批判の方法論の分析に基づいて、本稿は批判が人々を動機づけることができるか、批判が理に適った根拠によって正当化されているかを評価する。これによって、ハーバーマスとホネットの批判理論が抱える問題点を「批判の説得力」という観点から従来の研究よりも鮮明に描くだけでなく、彼らの問題点を克服する新たな批判理論の方向性を提示することが可能になる。

各章の概要

第一章 再構成的批判とは何か？

第一章では、ハーバーマスとホネット自身の理解に依拠しながらも、批判理論の理論構造を明確にするために練り上げられた発見的アイデアとして再構成的批判を提示する。

第一節では「内部から批判」「外部からの批判」「内在的批判」「系譜学的批判」という四つの批判の形式を比較検討する。この中で、内部からの批判はローカルな共同体において通用している規範を精査することなく依拠している点で慣習主義に陥っていること、外部からの批判は参加者たちの直観を離れて規範を根拠づけ定式化する特権が理論家に与えられている点で権威主義に陥っていることを明らかにする。これに対し内在的批判は前者二つの問題を回避する批判の形式であり、系譜学的批判は明示的には規範に依拠しない記述的な批判の形式であることを示す。

第二節では、再構成的批判を内在的批判と系譜学的批判を組み合わせた批判の形式として、批判を行う手順を詳細に定式化する。再構成的批判は、社会変革や社会統合の実践の参加者たちの視点からその実践の規則を「再構成」する第一段階と、そうした実践が機能不全に陥っていることを分析する「病理批判」という第二段階から成り立つ。批判は、参加者の直観知に内在的な規範を拠り所にしつつ、参加者たちが被る認識上の歪みを系譜学的に暴露することで、理論的な視点が参加者へと媒介されることを目指す。

第三節では、ハーバーマスとホネットの批判理論の説得力を判断する評価軸として、「動機づけ」と「根拠づけ」の両基準を示す。動機づけの基準は、批判の名宛人が、実践に内在する規範が欠損されている状況とその規範を実現することの必要性を理解し、社会的病理の克服へと動機づけられるかどうかを評価する。根拠づけの基準は、実践に内在する規範の正当化が理にかなった根拠を用いて行われたかどうかを評価する。これらの基準は、病理を診断する基準となる規範と、病理の説明仮説がどれだけ名宛人たちに反省的に受容できるものであるかを判定し、批判が成功する可能性を評価するものとして提示される。

第二章 ハーバーマスにおける再構成的批判の展開

第二章では、60年代から現在に至るハーバーマスの批判理論を、再構成的批判の形成史という観点から描く。

第一節では、60年代におけるハーバーマスのテクノクラシー批判と社会科学方法論の中に再構成的批判の萌芽を見出す。外部の観察者視点から行為を分析する実証主義科学も、内部の参加者視点から行為を分析する解釈学も、いずれも一面的であることが指摘される。既存の科学との対比から、批判理論は観察者の視点と参加者の視点とを行き来するような批判的な視点が必要とされていることを確認する。

第二節では、『認識と関心』における再構成的批判を解明する。再構成の議論として、人類の形成過程を促す労働・相互行為・批判という実践の超越論的条件である「認識関心」が再構成される。その中でも「解放的認識関心」に内在する支配から自由なコミュニケーションの理念が批判の基準となる。これによって、社会的抑圧を通じて人々が支配を合理化するイデオロギーを受容してしまう社会的な神経症現象として「歪められたコミュニケーション」が批判の対象とされた。しかし、この著作における再構成的批判は、自由なコミュニケーションの理念が実践に内在するものとしてではなく意識哲学的に基礎づけられている点、そして「社会的な神経症」の分析が十分示されていなかった点で問題を抱えるものであった。

第三節では、『コミュニケーション的行為の理論』における再構成的批判が、これらの問題を克服することで練り上げられたものであることを示す。ハーバーマスは形式語用論を採用することで、自由なコミュニケーションの理念はコミュニケーションの参加者の直観知に内在する語用論的規則として再構成される。そして歪められたコミュニケーションの病理は、精神分析を用いた神経症としてではなく、社会システム論を用いた植民地化現象として再解釈される。これらの理論修正によって、ハーバーマスは意識哲学的基礎づけと、社会的神経症の議論不足という『認識と関心』が抱えていた問題を克服しようと試みたことを明らかにする。

第四節では、『事実性と妥当』における再構成的批判を解明する。『コミュニケーション的行為の理論』は、語用論的規則に従わなければならない規範理由が十分論じられておらず、そして植民地化という病理状態を克服するための社会像が示されていない点で、依然として多くの異論に晒されていた。これに対しハーバーマスは討議倫理学を受容することによって語用論的規則を道徳原理として提示する。そしてかつて『公共性の構造転換』で描いた政治的公共圏の理念を再考することで、彼は民主的法治国家の理念を再構成する。これによって、民主的自己立法実践に内在する規範を基準にその障害を批判する再構成的批判の枠組みが示される。

第五節では、反省的受容可能性という理論の妥当性の源泉となるメタ倫理的議論がどのように変化したかという『事実性と妥当』以後の論点を分析した。討議倫理学の受容によって、ハーバーマスは道徳原理の妥当性は哲学者の間ないし科学者との間で行われる理論的討議によって決定づけられるという「権威主義的な読解」を許してしまう余地があった。これに対し、『真理と正当化』になると参加者は批判の妥当性に関する論証過程において発言権を持つという「平等主義的な読解」の可能性が示される。これによってハーバーマスがメタ倫理的次元においても理論と実践の媒介可能性を理論の妥当性を判定する一要因とみなすようになることを確認する。

第三章 ホネットにおける再構成的批判の展開

第三章では、80年代から現在に至るホネットの批判理論を、再構成的批判の形成史とい

う観点から描く。

第一節では、ホネットの承認論の形成を再構成的批判の第一段階にあたるものとして理解する。彼の承認論は、社会の変革過程を生活世界/システムという二元論から描き、了解を言語のテロスとするハーバーマスの対抗関係から形成された。了解はむしろ道徳的な社会闘争の帰結として描かれるべきであり、そうした闘争は人々が不正意識を経験することに起因する。こうした洞察から、ホネットは主体の不正意識を承認が毀損される経験として理解し、社会変革の実践として承認をめぐる闘争を提示する。そして彼は承認が毀損される複数の道徳的経験の再構成によって、ケア・平等・業績に関する三つの承認原理を再構成する。ただしこの原理は、三つの承認関係が主体の自己形成の心理的条件であるとする「形式人間学」によってその普遍性が主張されていたが、論争を重ねるとともに歴史的な規範であると位置づけ直される。これによってホネットは承認原理の根拠づけのために超歴史的に妥当する規範的な「進歩」の議論を導入したことが分析される。

第二節では、ホネットの「物象化」と「新自由主義のイデオロギー的承認」といった社会的病理論が再構成的批判の第二段階として位置づけられるかどうかを検討する。物象化は三つの承認に先行する「支持肯定」ないし「共感」といった原初的な承認が忘却される現象である。原初的な承認は、他者の視点を引き受け、それを意味あるものとして経験する条件である。だが、人種差別やポルノグラフィなどの物象化する表象や、質的意味を抽象する思考様式の中で、我々が原初的に同一の人間として他者に関与している事実が忘却される。新自由主義のイデオロギー的承認は、起業家的な人物像を高く評価する80年代以後に広まった価値評価の形態である。人々はこの人物像を自己実現のあり方として受容したが、これによって福祉国家を解体し、市民の脱連帯化を進めるような政策が正統化されるという逆説的な状況が生じている。しかし、このような病理分析の議論は、承認論という再構成的批判の第一段階と整合的に理解することが困難である。それゆえいずれの議論も、承認をめぐる闘争の機能不全という再構成的批判の第二段階として理解することは難しいことを示す。

第三節では、『自由の権利』におけるヘーゲル的社会理論において、再構成的批判が十全な形で提示されていることを論じる。ホネットはヘーゲルの「抽象法」「道徳」「人倫」という三つの社会領域をそれぞれ消極的自由、反省的自由、社会的自由を実現する規範的領域として描く。その上で彼は、それぞれの領域に内在し、自由の価値を保障する制度的規範を再構成し、承認の三原理は社会的自由の領域を構成する規範として理解される。これによってホネットは、新自由主義のイデオロギー的承認を、承認をめぐる闘争の機能不全として位置づけ直す。すなわち、自己責任の個人主義と起業家的な業績評価を自己実現のあり方として求めた結果、人々が社会を単なる消極的自由を実現するだけの領域とみなすようになり、社会運動や政治闘争が私化されていく現象として社会的病理が描かれる。ハーバーマスの植民地化を承認論的に再解釈することで、参加者視点から社会領域に対する歪んだ解釈として病理現象が理解されている点を論じる。

第四章 動機づけと根拠づけの評価：ハーバーマスとホネットの問題点

第四章では、「動機づけ」「根拠づけ」の基準をもとに、ハーバーマスとホネットの再構成的批判を評価し、ハーバーマスが動機づけ、ホネットが根拠づけの点で問題を抱えていることを明らかにする。

第一節では動機づけの観点からハーバーマスの問題点とホネットの優位性を論じる。動機づけとは、批判の基準である実践に内在する規範が毀損されている現状と、それを回復しなければならない必要性を名宛人の認識上の資源から理解するという「認識的なアクセス」の問題として議論される。ハーバーマスは、動機づけの問題を普遍的な憲法規範が倫理的生活形式に根付くことで達成できると考える。これによって、憲法規範を倫理的生活形式に合わせて解釈していく歴史的プロジェクトである「憲法パトリオティズム」が提示される。しかし、ハーバーマスは社会的病理の現象をシステムと生活世界という社会理論的なモデルから説明し、憲法パトリオティズムをシステムに対抗するプロジェクトとしても描いている。これによって、システムと生活世界という理論的言語によって説明された批判の基準は、参加者の前理論的な知識から直接的にアクセスできるものではない。それゆえ、病理を克服するための動機づけを説明することが困難である点が論じられる。

これに対しホネットは、批判の基準を参加者の不正義感覚から説明し、身に降りかかった不正、支配、苦しみから自らを解放しようとする参加者の視点から動機づけを論じようとする。すなわち、承認が毀損される経験は人格の統合性が侵害されている経験であるために、成員は承認関係を改善することの必要性を理解することができる。そして、社会領域や承認原理の解釈の歪みとして病理現象を論じることで、参加者の視点から病理が生じた経緯が系譜学的に説明される。こうした議論によって、ホネットの再構成的批判は、批判への認識的なアクセスを確保できることを示す。

第二節では根拠づけの観点からホネットの問題点とハーバーマスの優位性を論じる。ここでは、規範を超越論的反省による「究極的根拠づけ」を行う必要があると主張したアーペルと、規範が西洋中心主義的な進歩の理念によって根拠づけられていることを問題視するアレンの批判にどのように応答できるかを検討する。ハーバーマスにとって、批判を根拠づけるためには規範に従うべき理由の不偏性を正当化することで十分であり、権威主義的な議論に陥りかねない超越論的な論証を不要のものとみなすことができる。そうした正当化は、参加者の規範的直観と経験的理論との整合性によって論証される。すなわち、コミュニケーションと討議はポスト形而上学的な歴史的状況において代替不可能であることが経験的に示される。これによって西洋中心主義であるという非難に対しても、ハーバーマスは規範に従うべき理由の不偏性を機能的、道徳的、歴史的な観点から正当化することができる。

これに対しホネットは、批判の基準を「個体化」と「包摂」という内容を持つ進歩の理念によって根拠づける。ホネットはアーペルに対して、進歩の理念は承認をめぐる闘争の参加者が掲げる超越論的な要求に内在すると応答することができる。しかし、個体化と包摂はそ

れ自体では非常に抽象的な理念であり、特定の承認要求や制度的規範の妥当性を判断するために用いることができない。ホネットは進歩的と自らが判断する規範を再構成するが、これによって彼は西洋社会の規範を独断的に正当化しているというアレンの指摘に応答することができなくなる。こうした問題を抱えることになった原因として、ホネットが経験的研究と規範的直観の整合性によって規範理由の不偏性を正当化する可能性を考慮していないことが論じられる。

終章 再構成的批判の意義と課題

終章では、これまでの議論を整理しながら再構成的批判の内容を整理し、再構成的批判に近似しているがそれとは異なる立場と比較しながら、改めて再構成的批判の意義を確認する。

第一節では、第二、第三章の分析を踏まえ、ハーバーマスとホネットが批判を通じた理論と実践の媒介をどのように達成したのかを再確認する。理論的視点と参加者視点の媒介は、第一に直観的に共有する規範と現状との矛盾を示し、第二に参加者たちの認識上の歪みを系譜学的に暴露することで自己反省を促すことで達成されることを示す。

第二節では、ロールズの政治理論とフォアストの批判理論と比較し、再構成的批判の独自性を確認する。ロールズの構成主義の方法を用いた内在的批判は、社会的協働の実践に内在する基本的諸観念をもとに正義原理を練り上げる。これに対し、再構成的批判は社会変革の実践に焦点を当て、その機能不全を分析する病理批判の議論を持つ。これによって政治理論と批判理論は、「参加者視点の再構成」を行うことを共有しながらも、批判が必要な問題状況が異なるために、理論と実践を媒介させる方法が異なっている点が論じられる。

フォアストの批判理論は、道徳的な正当化実践に内在する原理を再構成し、その実践を歪める権力現象を批判している点で一見再構成的批判の構図を有している。だが、彼の再構成の議論は、原理への超越論的反省であるために、参加者の直観知を再構成するハーバーマスやホネットとは異なっている。そしてフォアストは批判の名宛人を常に道徳的で理性的な人格であり続けると想定しているために、理論的視点と参加者視点の媒介について考察する必要が無い。この点で彼の批判理論は外部からの批判と呼ぶべきであることを論じる。さらに、再構成的批判とフォアストが行う「理想化」の程度を比較しながら、再構成的批判は社会的病理という現実の困難において参加者たちが引き受けられる範囲で理想化を行うべきであることを主張する。

第三節では、動機づけの問題を抱えるハーバーマスと、根拠づけの問題を抱えるホネットの批判理論をどのように克服すべきかを論じる。ここでは承認をめぐる闘争を社会変革のモデルとするホネットと、語用論的規則の整合説的根拠づけを行うハーバーマスの議論を統合する指針が提示される。「認識的不正義」の議論を「知者」としての承認の毀損として理解する近年の研究を参照しながら、知者としての承認が成立するための語用論的規則を

再構成する「承認の語用論」という統合案が、有望な方向性であることを主張する。

結論

本稿は、ハーバーマスとホネットのテキストを解釈する中で、参加者視点の「再構成」と理論家視点の「病理批判」を媒介し、二つの視点の間のギャップを埋めるための方法論として再構成的批判を提示した。批判理論における「批判」とは、第一に、社会変革の実践に内在する規範の侵害があるにもかかわらず、人々が不正を甘受している状態の指摘である。批判者は、参加者も直観的に共有しているはずの規範に反するような病理状況を示す。そして第二に、批判の名宛人がその形成経緯を知ったならば受容しないであろう信念の歪みや誤りの暴露である。批判者は、本来ならば顕在化するはずの社会闘争の鎮静化現象を名宛人たちに系譜学的に説明することで、自己反省と矛盾の修正を促す。内在的な規範を投げ所にし、名宛人の認識上の歪みを現実的に描くことによって、理論的視点と参加者視点の「媒介」が達成される。

ハーバーマスとホネットの批判理論は、全体として見れば以上で見た批判のための議論構造を有しており、彼らが直面した様々な課題とそれに対処する理論の修正は、効果的な批判のために行われてきた。これが本稿によって明らかにされた点である。方法論の観点からハーバーマスとホネットを読み解く本稿の試みによって、彼らの理論の全体像、独自性、そして問題点を明らかにした。もちろん、本稿は彼らに代わる新たな批判理論については、その方向性を示すに留まった。だが、批判の方法論という批判理論への新たなアプローチによって、本稿はハーバーマスとホネット研究の水準を向上させることに貢献できると考える。